

クルー・チャットンの生きられた歴史にみるポル・ポト政権期後カンボジアの初等教育

—地方都市における教師への聞き取り調査から—

千田 沙也加

主論文の要約

本研究の目的は、ポル・ポト政権 期後の国家の復興・再建期であり、社会主義体制下であったカンプチア人民共和国期（1979-1989年）の初等教育再建 に関して、政策史研究だけでは明らかにできない個々の教師による「生きられた歴史」を検討することにより、この時期の初等教育再建の意味や価値を、ローカルで個別的な観点から明らかにすることである。特に、本研究ではポル・ポト政権期後の初等教育再建のために、教師の資格を問わずに、緊急の対応で教師に任命された人びとであるクルー・チャットンたちに注目した。聞き取り調査から、クルー・チャットンの経験と認識を歴史的な時間軸に沿って編集したライフヒストリーと、発話を逐語訳した語りを合わせて「生きられた歴史」とし、緊急の対応で初等教育再建に携わったクルー・チャットンには、一体どのような人びとがいたのか、その背景と特徴を明らかにし、彼らが経験し認識した初等教育再建の特質を検討した。

本論文は、序章、第1章から第6章、終章から構成される。第1章から第3章を第1部とし、人民革命党政権が目指した初等教育の検討を主眼とした。第4章から第6章を第2部とし、クルー・チャットンの生きられた歴史へと視点を移して考察を行った。

序章では、人民共和国期の教育を中心とする先行研究の意義と問題点を批判的に検討し、本論文の課題と射程を示すとともに、本論文の中心的な研究対象であるクルー・チャットンの背景を確認した。特に、本論文が対象とする「クルー・チャットン」は、これまでの国際教育開発を中心とした先行研究において、ポル・ポト政権期の負の遺産を抱えて「読み書きのできる者ができない者に教える精いっぱいの状態」だったという固定化されたイメージがあった。

第1章では、人民共和国期の初等教育の背景として、カンボジアの教育の歴史的展開と、人民共和国の国家体制および教育政策と教員養成制度を素描した。第2章では、政権が構想した初等教育のあり方の特徴を、政権側が発行した機関紙『カンプチア』を用いて考察した。考察から、同紙が教育再建の素晴らしい成果を伝えることで、目覚ましい教育再建の進展が国の再建を示す成功例と位置づけていたことを明らかにした。また、機関紙『カンプチア』で描かれた教育再建像の基軸を、カンボジアの伝統的な価値観に求めるのではなく、東側ブロックに認められうる社会主義の思想に求めるしか選択がなかった政治状況を含めて明らかにした。

第3章では、1980年『普通初等教育カリキュラム』の特徴を検討した。カリキュラムの検討からクメール語と「労働」が主要な教科であることを明らかにした。カリキュラ

ムにおいて、国民の言語として位置づけられたクメール語の目的に、感情的で単純化された反ポル・ポト思想の形成が明記されていた。ここにはルーツが同じであるポル・ポト政権に対して思想や歴史を直視した克服を目指さない人民革命党政権側の姿勢が表れていることを指摘した。また、カリキュラムにおいて「労働」が社会主義の思想に基づいた主要な教科であり、学校と家庭、そして地域社会を結ぶ役割が構想されていた。

第4章以降では、本論文の主要な考察対象であるクルー・チャットンの生きられた歴史に焦点をあてた。第4章では、(1)ポル・ポト政権期前に小学校教師の経験があり、何度も引き抜かれた経験のあるMP先生、(2)小学校のクルー・チャットンになってから、コンダール州の教育局長まで経験したLCT先生、(3)青年組織の代表からクルー・チャットンになり小学校長まで務めたHH先生、(4)クルー・チャットンであり村で最良の小学校教師といわれるに至ったUK先生の4名のライフヒストリーを記述し、個別の生きられた歴史にみられる特質を考察した。同章で検討した4名のライフヒストリーからは、これまでの固定化されたイメージと全く異なる高学歴のクルー・チャットンがいたこと、自主的とも強制的ともいえない「引き抜き」のあり方、過去の教育や新しい教育を「専有」する「良い教師」としてのクルー・チャットン像が明らかになった。

第5章では、考察の対象とするクルー・チャットンの数を増やし、人民共和国期の初等教育にかかわる彼らの経験と認識の特質を検討した。同章では、クルー・チャットンが小学校教師になった際に保有していた学歴は様々で、尚且つ教師になる際の短期養成訓練の期間と保有する学歴には関係がなく採用されていたことが明らかとなった。加えてクルー・チャットンたちには、この時期に「引き抜かれた」全ての教師を含んだ「クルー・チャットンであること」の認識があった。さらに、クルー・チャットンの生きられた歴史にみられた共通する特質として、ポル・ポト政権期以前の知識が教師の権威を保証する意味を失い、分け合う対象と変容した経験を明らかにした。

第6章では、第3章で考察したクメール語と「労働」に「政治道徳」を加えて、クルー・チャットンの生きられた歴史を分析し、これらの教科にいかなる意味や価値が与えられたかを考察した。クルー・チャットンたちはクメール語教育において反ポル・ポト思想を重要視していなかった。その一方で、政権が構想した反ポル・ポト思想の形成は、ポル・ポト政権期後という社会的背景に紐づけられた人民共和国期に特殊な教科である「政治道徳」の学習内容として認識されていた。同章ではまた、「労働」に関するクルー・チャットンと元児童に対する聞き取り調査から、それぞれの現実における意味や価値の違いを考察した。クルー・チャットンたちは、新しいカリキュラムにみられた社会主義の理念を反映する重要な教科として「労働」を認識しておらず、共通して「労働」に対する教育的な価値づけされていなかった。それどころか、クルー・チャットンたちはポル・ポト政権期にこそ「労働」と教育に強固な結びつきがあったと認識していた。一方、元児童が語った「労働」の経験は1980年『普通初等教育カリキュラム』に示された意図に沿うものだった。しかし、元児童の経験は個人の生活世界の再建に価値づけ

られた実利的な側面を持っており、教育としての「労働」の理念とは異なる意味もあった。また、教師たちが教育的価値を見いださなかったために、「労働」の生活世界における重要性を失うとともに、教育現場で実施されなくなっていった。

以上の考察を通した主な結論は以下である。

第1に、政権側による教育再建にみる教育観として、未来の国民形成のための手段として教育があった点である。それに対し、クルー・チャットンは、目の前の子どもたちに主体的な学びの必要性から教育再建に取り組んでいた。政権とクルー・チャットンの間に明確に異なる教育観があった。クルー・チャットンは政権から統制を受けることはなく、教育再建に生きたといえる。第2に、政権が社会主義教育とポル・ポト政権期との差別化を目指したにもかかわらず、クルー・チャットンは、教育再建において、ポル・ポト政権期との差別化に無関心だった点である。例えば、「クメール語」の教育目標に反ポル・ポト思想の形成が掲げられていたが、こうした特徴は語られなかったし、「労働」に関しても、教育的な価値を見出されていなかった。これは1つ目の指摘である、クルー・チャットンたちは目の前の子どもたちのための教育再建が目指されていたことと関連している。第3に、政権側は、現場における教育再建をクルー・チャットンに一任していたあり方を指摘したい。一任されたクルー・チャットンは、政権側の教育再建の意図を汲み取り実践するよりも、自らのポル・ポト政権期以前の学習経験を「専有」して初等教育再建に取り組んでいた。そして、当然の結論として先行研究で論点となっていたベトナムの影響は、クルー・チャットンによる教育実践の現実にはほとんど影響がなかった。

最後に、本論文が考察の中心としたクルー・チャットンの生きられた歴史の比較教育学研究における意義を論じた。クルー・チャットンの生きられた歴史は、文脈に依存した意味や価値もつ「小さな物語」である。こうした「小さな物語」による比較教育学を「小さな比較教育学」とし、個々の生きられた歴史による「小さな比較教育学」は、読み手の「自己の物語」に新たな知見を提供する可能性を示唆した。